

続 かがみがはらの

# おかし話

かがみがはら民話同好会



9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak





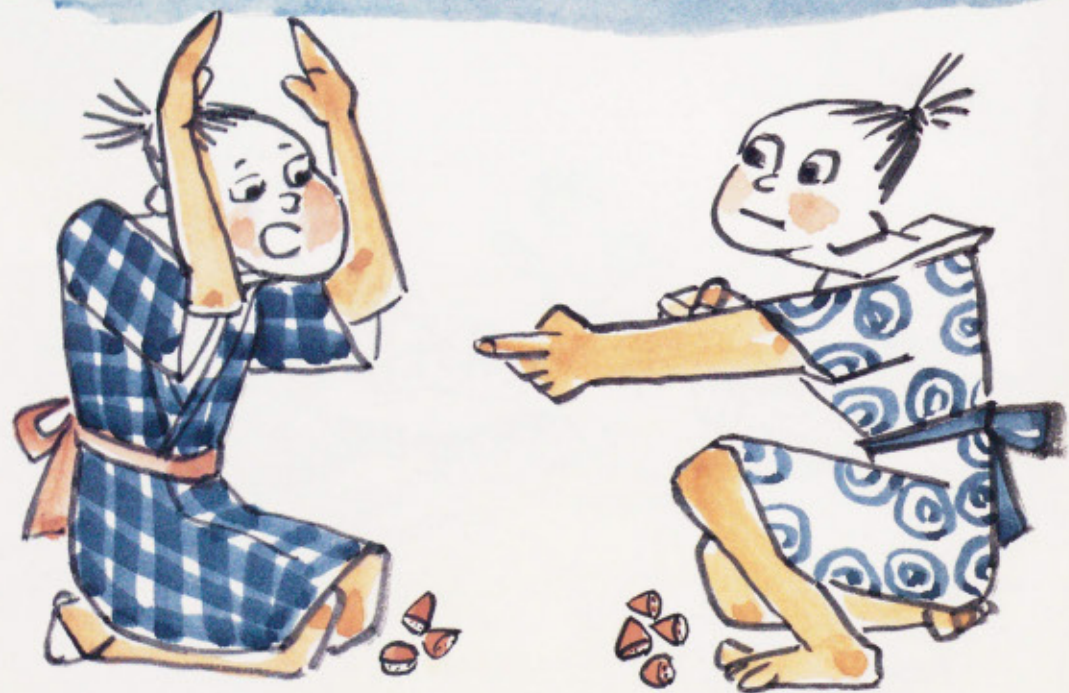
# かみかほらの おかし話 絵図



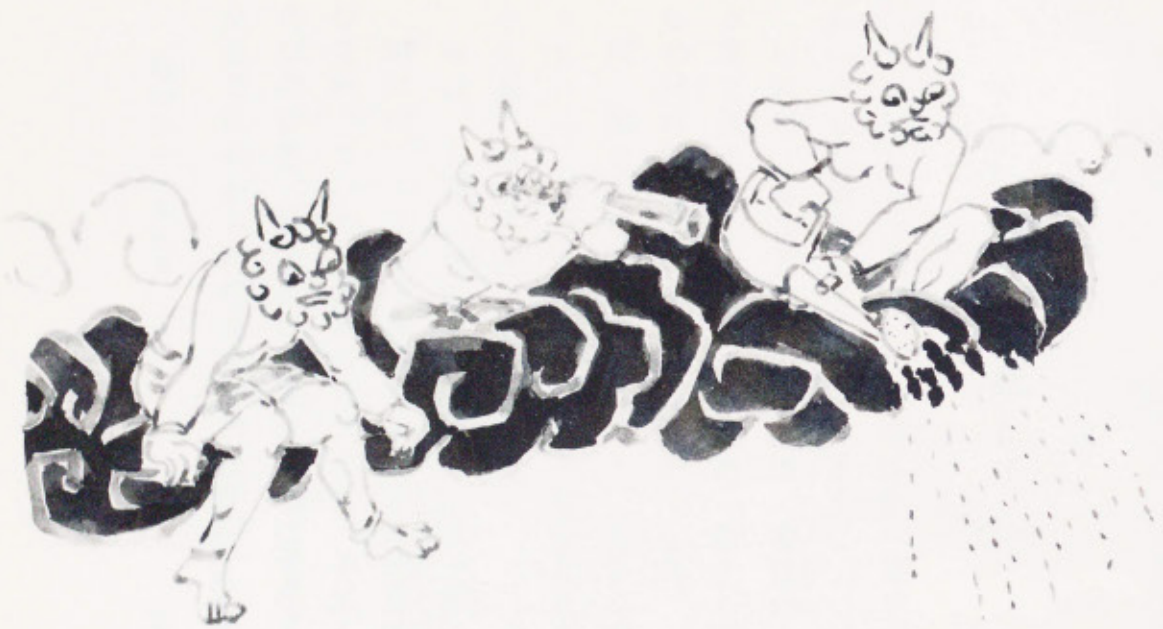


続かかみがはらの

# むかし話







もくじ

はじめに  
那加のはなし

徳の高いお坊さま……………	11
お諏訪さまのおみたらし……………	18
雷の手……………	27
げえろまつり……………	35
ハオカ山の盗賊……………	43
タヌキやぶ……………	54
稲羽のはなし……………	61
すげ傘如來……………	68
かたは屋敷……………	74
前波のつつみ……………	83
小佐野の馬頭観音……………	92
白ひげさま……………	100
つぼんどしよろ……………	108



おのぶさまとキツネ……………  
うぬま  
鵜沼のはなし……………

おとさと豆ダヌキ……………	117
おはちろうさま……………	122
弁天さまの池……………	129
白龍さま……………	137
山中不動明王……………	145
すえの雨ごい……………	151
桃太郎……………	158
ちよツバキ……………	165
目の神さま……………	173
蘇原のはなし……………	183
エンドウ豆と戦……………	195
石神さま……………	201
雷の落ちた井戸……………	208
あとがき……………	208



表紙題字 各務原市教育長 水野定之

表紙・見返し・さし絵 小島政信

(元加第二小学校教諭  
行動美術協会会友)

### 発刊を祝して

テレビという素晴らしい媒体が、ブラウン管を通じて、私たちに毎日いろいろなお話をしてくれています。

けれど、私などの幼かった頃、布団の中で、添い寝をしてくれた母が、方言を混えながら話してくれた「むかし話」は、小さな私の心を揺さぶり、私の魂に語りかけてくれたものでした。

同じ話を、何度聞かされても、飽くこともなく、又、恐ろしい話を聞くくと一人ではトイレへ行けなくなることを心配しながらも、毎晩、母に「むかし話」をせがんだものでした。

私は、人間、特に子どもさんには「夢」を持って欲しいのです。

時には、ユーモラスでさえある妖怪変化たちが、私たちの町を舞台に飛びまわっていたと考えるだけでも、子どもさんたちの心は大きく、楽しく、のびのびと、翼を拡げて大空を翔けて行くのではないでしょう。著者の先生方に心からの敬意を捧げます。

昭和五十八年九月

各務原市長 平野喜八郎



## はじめに

人はだれでも、ふるさをなつかしく思う心があるものです。なぜだろうかと思つてみます。自分が生まれ育つた土地の山や川や原っぱ。そこで遊んだ思い出。両親・祖父母・きょうだい・近所の人々などの思い出。お祭り、盆おどりなどの行事にまつわる思い出。それらのことが、人の心にふるさをなつかしむ思い出をいくつも育ててくれ、心の中にしつとりと落ち着いていくからでしょう。

だが、もう一つあるのです。それはふるさとのことばで語り聞かされた「むかし話」なのです。近ごろはおじいさんやおばあさんからおもしろい、時には不思議な「むかし話」を聞かせてもらうことが少なくなつてしまい、残念なことだと思つていました。

ふるさをなつかしみ、ふるさを愛することは、まずふるさとの自然や、土地のようすや、行事・生活習慣などのいわれなどに、深いしたしみを感じることから始まるのだと、私は常々思つていました。

みなさんが、この『続・かかみがはらのむかし話』を読み、わたしたちのふるさと各務原にいつそうのしたしみと、ほこりをもってくださることを心から願つています。

昭和五十八年九月

各務原市教育長 水野定之

## この本を読まれる方へ

人間が言葉を作り、その言葉を使って自分の心の中の気持ちを手伝うに伝えることができ、るようになってから、人間の口から耳へ伝えられ、受け継がれて来た話は驚くほど多いものです。しかも、その話は、妖怪・神仏・頓知・教訓・悲劇など、さまざまな種類に分けることができ、わたしたちは、その時その場で、その昔話に耳を傾けながら、喜び・悲しみ、驚き、怒りながら自分の心を豊かに育てて来ました。これは、とてもすばらしい出来事と言えます。

五年前に続いて「かかみがはらのむかし話」が発刊されました。わたしたちの町には、わたしたちの祖先が残してくれた多くの大切な話があり、それを今様に書き改めてくださった先生方の温かい心とご努力に感謝します。みんなで昔を懐しく思いおこしながら、日本人として、かかみがはらの市民として、人間の心を改めて考えてみてほしいと思います。それがこの本の目的なのです。

昭和五十八年九月

各務原市小中校長会長 大島美信



なかのはなし





徳とくの高いお坊ぼくさま

むかし、中山せん道から南に入った  
松林の中に、草くさぶきの小さいお  
りが、一けんひっそりとたつとつ  
たそうな。

この草くさ庵あんにみすぼらしいお坊ぼくさ  
まがひとり住んでござった。食  
べる物といえは、そばそば粉こなを水でか  
いて一日いっぺん食べるだけで、  
いつ見ても、いっしんふらんに念ねん





仏をとなえてござったげな。苦しんどる人をすくってやろうと、それはそれはきびしい修業をかさね、苦勞をしてござったんや。

やがて、その名が聞こえ、おおぜいの人たちがこのお坊さまを信じ、そのありがたいお話を聞きたいと草庵をたずね、おまいりするようになったそうな。

このお坊さまは、『南無阿弥陀仏』の六字の木版をいつもだいにしてござった。お坊さまが紙を百枚ぐらいかさねた上から、この木版をおしんざると、ふしぎなことに文字がぜんぶの紙に写ったそうや。お坊さまは、おまいりに来た人にいつもこのおふだをおさずけなされていたんや。

おふだをさずかった人は、まじめにはたらき、おまいりをしていると、重い病にかかったり、不幸なめにあわず、なかようくらすことができるもんやで、うわさが広がり、評判になつたんや。

そのころ、村里では夜のうちにわとりやうさぎがぬすまれたり、田畑の作物があらされたりして、こまっっている人があどをたたなただげな。

お坊さまのお説教のあつたある日のこと、おおぜいつめかけた人々の中に、ひとときわ目立って美しいむすめさんがおまいりをしておつた。

お説教が終り、お坊さまはいつものように六字のおふだを手づからさずけて回らしたが、その美しいむすめには、ことさらかたくその手をにぎりしめて、おふだをさずけやしたんや。そのふるまいを横目にながめとつた人んたあはもちろん、弟子たちまでがおどろいて、

「ああ、きれいなむすめには、だれもが見とれるもんやな。上人さまでさえ、あれやもん。」





と、ため息をもらしとった。  
やがて、おまいりの人が帰った  
あと、弟子がお坊さまに向かい、  
しずかにそのわけをたずねたんや。  
お坊さまはわらって、  
「ああ、なさけなや。お前たちの  
目には、きょうのむすめがまこ  
との美人としてうつつたのか。  
そんなことでは、まだまだ仏道  
修業が足らんぞよ。あのむすめ  
こそ北の山中の『うばがふとこ  
ろ』に長くすみ、里に出ては人  
をこまらせ、悪いことばかり



しとる老いギツネの化けものな  
るぞ。作物をあらしたり、にわ  
とりをとったり、村のしゅうを  
ばかにしたりする悪ギツネじゃ。  
もう今ごろは山に帰って、あの

おふだを口にくわえ、キツネあなのそばで成仏しておろう。もし、  
うたがわしければその山へ行ってみなされ。」  
と、言わしてしずかに目をとし、ねっしんに念仏をとなえ始めやした。  
まさかと思しながら、弟子たちがさつそく『うばがふところ』へ  
行ってみると、お坊さまの言わしたとおり、キツネがおふだを口に  
くわえたまんま、あなのそばで息たえとったんやと。弟子たちは、  
「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ……。」  
と念仏をとなえながら、『南無阿弥陀仏』のおふだをそうつとはずし



ておしいいただき、ふところにしま  
ったんや。そして、

「悪いことばっかした老いギツネ  
やが、とうとう仏ぼんにならしたわ。  
なむあみだぶつ、なむあみだぶ  
つ……………」

と言いなながら、手あつくほうむつ  
てやったんや。

「上人しやうにんさまをうたがったわが身が  
はずかしい。」

「さすが上人しやうにんさまやなあ。わしら  
とは修業しゆぎやうがちがうなあ。」

と感心しながら、いおりに立ち帰



り、先の無礼ぶれいをおわびしたんやと。

そののち、弟子でしたちは上人しやうにんさまの徳とくをしたって、ますます修業しゆぎやうに  
はげんだそうな。

坂井多美子

註、この話に出てくるお坊さまとは、  
播隆上人はくろうじやうにん（一七八二—一八四〇）  
のことです。





お諏訪さまの  
おみたらし

ずつとむかしから、桐野の諏訪神社の前に、「おみたらし」という池があつたんや。

池というほどの大きな池じゃない。ちょうど、すもうばの土俵ぐらいの大ききで、まあるい形をしとつた。

その池のまん中に、山の形をした岩があつて、頭が水面から突き出とつた。岩のまわりから

は、ボコボコ、ボコボコと清水がわき出とつてな。

そして、その水は、二つに分かれて流れてつた。一つは、南の大きなため池へ流れこんでな。今もあるじゃろ、あのお宮の前の桐野池じゃ。その池のたまり水は、田んぼの用水に使われよつてな。もう一つは、村なかを流れていったんや。この桐野部落の前の道ぎわを流れとる小さな川がそれなんじゃ。





わしらは、まい日まい日その水を使ってくらしてきたのじゃえ。  
のみ水にも使った。やさいも洗った。すきやくわも洗ったし、ふる  
水にもくんでった。時にはせんたくもしたんや。

また、この村を通って東の方へ旅をする人も、東の村々から尾崎  
峠をこえてきた人も、みんな、このわき出とる水をのみ、ひと休み  
して行かれたのじゃ。

ちようど、お宮さんの前にわき出とるもんで、おまいりする人は、  
みんな、わき水で手や口を清めたもんや。それがまた、おもしろい  
ならわしがあつてな。まん中の岩に水を三べんかけてから、手をあ  
らいよつたんじゃ。

見たところ、なにもかわつてない池にみえるが、実は、ほんにふ  
しぎな池でう。

ずいぶん、むか  
しのことだったそ  
うな。

ある年、日照り  
が続いてな。何日  
も雨が降らなんだ  
のじゃ。

東の村も、南の  
村も、みんなひ害  
にあつた。田も畑  
も土がからからに  
かわいて、作物が  
かれていく。ほう





ほうの池の水も、川の水もなくなり、水ぞこが顔を出しとる。井戸いどの水も干っあがってしまつて、人びとはこまりはててな。あちらこちらで雨乞こいのいのりが始はじまつたんじや。

それほど、ひどい日照りひでりじゃつたのに、みたらし池だけは、ふしぎとかれなんだ。そして、いつもとかわらず、ブクブク、ブクブクと、水がわき出て流れとつたのじや。

おかげで、わしらの村の田畑だけは、その年も豊作ほうさくじゃつたと。もちろん、この池の水の流れて行くさきざきの村も、いっしょに助たすかつたそうな。

やがて冬がきて、あたり一めん雪におおわれ、手あらい鉢はちや井戸いど水があつい氷をはつても、この池は、岩の頭に白い雪をかぶつただけで、いつものように、こんこんと水があふれ出し、白くかすかに湯ゆけむりさえ立てながら、この小さな川を流れてつたのじや。まる

で何かをささやくように、さらさらとな。

そんなありがたい水なので、いつの世よに、だれが名づけたかしらんが、みんな、

「お諏訪すわさまの『おみたらし』」

とよんで、この池をだいじにしてきたのじや。

よそ村に、水道がひかれるようになって、おみたらしのわき水のおかげで、わしらはずっとこまらなんだ。

あの水は、きれいやった。のみ水にも使つとつたが、その味あじがほんとうまいんじや。井戸いどをほつてもみたが、そりやあ、くらべものにならん。井戸いど水のお茶なんて——まずうてのめなんだ。うまい水やといつて、酒づくりの水に、関せきの方からわざわざ汲くみにこられたこともあつたほどや。





てしま  
まっ  
た。  
わしら  
のくら  
しをゆた  
かにして  
くれた池  
は土の下

ところが十年ぐらい前じゃった。  
尾崎団地をつくる工事が始まった  
時、わしら村人の気持ちもわかつて  
もらえず『おみたらし』は埋められ



にねむってしまったのじゃ。でも、みんなのねがいが強かったもんで、かわりの池をつくってくれた。

道をはさんだ北側で、ちょうど神社の境台に、りっぱな岩組をした池がつくられた。そして、その池の北がわに、大きな石碑を建てた。

「道一つへだつとるだけじゃから、よかろうて。」

「前の池のそばじゃもん。今に、きれいな水がわき出るぞ。」  
みんなは待った。

だが、いくら待っても水はわき出ななんだ。一てきの水も出てこなんだ。そして、そのつくった池も、いつのまにかこわされてしまったのう。

それっきり、今は池もなく、水も出ず、ただ夏草ばかりが石碑をおおうようにしげり、荒れたまんまになつとるのじゃ。



山田袈津子

## 雷の手

むかし、なかの里には、よく雷が落ちたそうなの。

ある年の夏や。働き者で知られている義兵と、人いちばい親思いのむすこが、田んぼのあぜの草刈りをしてっていると、西の方から雨雲がもくもくとあらわれた。今に雷が来るぞと思いつながら、もう少しだから刈ってしまおうと、かまの手をはやめていた。

すると、きゆうに目の前が光り、ザーと走るような雨と同時に、雷がくだけるような音をたてた。あわてたふたりは、その場で折り重なって伏せた。しかし、おそかった。

義兵は、かまをにぎったまま、手から半身がまっくらこげになってしまった。むすこは、ふしぎなことに助かったが、そのかなしみ



は大きかった。

それからというもの、雷がにくくて、にくくてたまらなくなってしまうた。

(よりもよって、この村の中で、父だけをなげうばっていったのだ。雷のやつめ。)

と、腹の底からうらんだ。

村の人々は、雷が鳴りだすたびに、恐れて仕事も手につかないというのに、義兵のむすこは、外へ出て、雷に向かってするどい目つきで天をにらみ、かまをふりふり



雨の中をずぶぬれになって走りまわった。

稲妻の光る方へ、光る方へとな。

「どうとう気がくるってしまわしたなあ。かわいそうに。」

と、だれもがいうだけで、止めようにも止められなかった。

ちようど一周忌をむかえた命日やった。

朝はようから、むし暑うて、うだるようやった。きつと、きょうも雷さまが来るにちがいないとみんな思っていた。





あんのじょう、夕刻から雲が天をおおい、まっ暗になったかと思  
うと、地うなりがして、雷が鳴りひびいた。

むすこは、酒をあおり、鎌をもって外へ出た。

稲妻は矢のように走り、青光りをむすこの顔にあてた。きらきら  
と目をかがやかせたむすこは、ゴロゴロと鳴る方をにらみつけなが  
らどんどん歩いていった。

氏神様の森をすぎ、とうとう少林寺の境内に來た時やった。

ガラガラガラーツと耳をつんざくばかりの雷鳴が天地にとどろき、  
するどい光が雲を二つに分けた。その間から、それはそれは恐ろし  
い顔が現われた。髪の毛をさか立て、百万燭光もあるかと思われ  
るような強い光を出した目ん玉と、耳もとまでさけた口からするどい  
牙をむき出して、まっかな炎をふき出しているのだ。

どきようをすえたむすこも、これには、いっしゅん、足をすくめ

たが、これこそ、待っていた雷の正体にちがいない。父のお守りに  
よって、今、ここに対面してきたのだと信じ、心を強くして、じつと  
目をすえた。

すると、毛むくじやらかな体に、金色のつばさをひろげ、こちらへ  
近づいて来るではないか。

むすこは、息をのみ、目をこすり、足をふんばって、

「雷め。よくぞ、正体を現わしたな。おとつあんの命をうばった  
にくきやつ。きようこそ、おらが相手をする。さあ、こい。」

と、大きな声でさけぶやいなや、鎌をふりかざして放りあげた。

ピカッと、するどい光が走るやいなや、ガロゴロギャオー、ビ  
シャン、ガオーと、まったく天地がさけたような音がして、石灯籠  
が、ゴロンゴロンとこぼれ落ち、むすこも、ばったり倒れた。





しばらくすると、あたりは静まりかえり、雲は切れ、青空がのぞきはじめた。さっきのできごとはうそのようだった。しかし、やけどげたむすこの死体が残されていた。

村人がつきつきに集まってきた。あまりにも、いたいたいむすこの姿に手をあわせ、ころげた灯籠をのけると、これまた、びつくりした。

毛むくじゃらな猿か人間かわらん手が落ちていたのだ。

「おかしいぞ。いったい、これはなんだろう。」と、だいじにひろつて、少林寺の和尚に見せにいった。すると、

「これは、きつと義兵のむすこに切られた雷の手にちがいない。雷といえどもふびんじゃ。わしがあずかつて、むすこの霊と共に毎日、ねんごろにお経をあげてやろう。心配するな。」  
と、いって、和尚は、桐の箱にいてねいに納めなされた。



あくる年からや。

雷かみなりがいくらひどく鳴なっても、ひとつも、この村には、落ちんようになつた。それどころか、この雷かみなりの手をいちど拝おがましてもらつた人は、雷かみなりのさいがいかからは守まもられたそうやに。

ほんに、ふしぎやなあ。

長谷川恭子

## げえろ(蛙)まじろ

むかし、むかしのこと。

新あた加納かのの日吉ひよし神社じんじゃのあたりは竹やぶが生おい茂しげり、ひとかかえもある大きなひのきがそびえ立ち、昼間ひるまでもうすぐらくて気味きみのわるいところだつた。

その森の中に、たたみ十まいしいたほどの池いけがあつた。水はうすよごれていて、魚一いびきいなかつた。ときどき池いけの底そこから大きなあぶくが、ゴボツ・ゴボツとわきのぼつていた。

ところが、この池いけにいつのころから大きな大きなひき蛙かえるが住みつくようになつた。夜になると森じゆうにひびくような声で「グワ―・ゴォー」と、なくのでお宮みやの森はいつそう気味きみわるくなつてし



まった。

さて、このひき蛙・住んでみたものの池はせまく、毎日がたいくつでしようがない。とうとうがまんができず池からはい出しては村人にいたずらをはじめた。

夜、帰りのおそくなった村人がお宮の森の前を通ると、いきなりとび出して、

「グワー・ゴオー。」とおどしたり、お正月やおまつりできれいな着物を着たむすめさんたちが通るとバチャツ・ベチャツとどろ水をかけた。



「キヤーツ・げえろのおばけえ。」

「助けてえー。」

「着物がどろべたんこやわー。」

みんな大声をあげてにげていった。そのようなすをみて、ひき蛙はまんぞくしていた。

こんないたずらをしょっちゅうするので、村人はお宮の前を通らないようになった。

ひき蛙は、とんとおもしろくなくなった。

そこで夜になると村人の家まで出てあるくようになった。ドンドン戸をたたくと家の人がびっくりしてとび出すのをおもしろがったり、おかつての食物を食いあらしたりもした。

あるときは、村人がしんるいで酒をごちそうになりいい気分でお宮の前へふらりふらりとやってきた。とつぜん黒い大きなものが、





「グワッー」と、とびついた。

「ウエー、助けてくれー!」

ごちそうをほうり出してにげ帰った。

次の朝、池のふちへいつてみると

からになった箱だけがおちていた。

村人たちは、この蛙のいたずらに

すつかり腹をたてた。

ある夜、みんな集まって

「いたずらをやめさせるには、どう

したらええやろか。」

と、相談をした。

「相手が蛙では、どうしようもねえ

のう。話したってわからへんし。」

「池が小さいでおもしろいやろか。」

池を大きくしてやったが、だめやった。

「赤い着物がほしいんをやろか。」

きれいな着物を池にほりこんでみたが、だめやった。

「腹がへつとるんとちがうやろか。」

「そうかもしれんのう。前にごちそうをとられたとき、二・三日い

たずらがなかったようや。何にもおらん池やし、あんな大きな体で

は腹がへつてかなわんのやろ。」

ごちそうをたべられた村人が言った。

「うんとごちそうを食わせたら悪いことはしんようにならへんやろ

か。」

「そりゃあええ。ひとつやってみよまい。」

村人たちは、ごちそうをもちよつてお願いすることにした。



祭りの日は、ちょうど初午の日  
であった。蛙のすきな雨が朝から  
ふりはじめた。池の前にごちそう  
が山のようにつまれた。村人は、  
「ぎょうさんごちそうやるで、  
もういたずらはするなよ。」  
と、お願いをしてからごちそうを  
池の中へなげ入れた。

とたんにはいたずらがなくなった  
ばかりでなく、それからは日照り  
でこまつたときお願いすると雨雲  
をよんで雨をふらせたり、病人が  
あると家の門口へ病氣によくきく



葉の草をとどけてくれた。こんなことから、あんなにこわがってい  
た蛙をいつのまにか福蛙さまとよぶようになった。

毎年初午の日になると蛙祭りがおこなわれ、祭りでひろった餅を  
たべると家中に悪いことがおこらんようになった。これを聞いて遠  
くからも蛙祭りにやってきた。ふしぎなことには、蛙祭りの日はい  
つも朝から雨がふった。日吉様の道を夜通るときは、福神様をふん  
だりしないようちようちんに火を入れて足もとを明るくして通るよ  
うにしたそうな。

いまでは、この池もうめられて日吉様のあたりは家が建ち並び、  
すつかり町になってしまったが、初午の日がくると、アンドンが立  
ち並び「厄ばらい」のげえろ（蛙）祭りとして、おまいりにくる人



が多いということである。

中島 忠和

## ハオカ山の盗賊とうぞく

ずうつとむかし。

新加納しんかのうあたりに、源造げんぞうという人が住んでおった。源造は、お百姓ひゃくしょうのかたわら、織物の商あきいをしておったので、使用人しようにんを五・六人かかえ、家屋敷いえやしきもりっぱなものであつたそうなの。おだいじんの上、頭もよく、人なつつこいもんで、みんなから「源さん、源さん」としてわれていた。

さて、その源さんが、大みそかも近づいたある日、鶉沼宿うめまじきへ商あきいのお金を届とどけることになった。

そのころは、新加納坂しんかのうざかから鶉沼宿うめまじきに通つうじている道は、細ほそい石ころ道一本あるだけだつた。家もなく竹やぶと草原ばかりのさびしいと



ところで、しかも、その途中には、盗賊が住んでいるおそろしい山があった。その山の名まえを「ハオカ山」といって、たいていの旅人は、その山の近くで、あり金をぜんぶ取られてしまうといわれた。

そもそも、その山に「ハオカ」などという名がついたのは、そこに住みついている盗賊どもが、お金をもつていそうな人や、ちよつといい着物を着ている人、それに美しい娘などをみると、

「おい、あそこを通る旅の衆をどう思う。」

「おつ、ありやあ、まちがいなく金持ちじゃ。」

「いっちょよ、はいだるか。」

「そいじゃあ、ハゴカ。」

「いや、オコカ。」

というようなわけで、「ハオカ山」になつたんだそうなの。

そこで、源さんもきょうは、用心のために使用人の作助をつれて

出かけることにした。それだけではない。まず、命について大切な金子などを、じょうぶなきんちやくに入れ、ジャラジャラ音がしないように固くむすんで、ふところの中へしつかりしまいこんだ。

その次には、ふたりともぼろぼろで、こじきの着るような粗末なものをはおることにした。ひと目で金持ちには見えないための用心である。その上、もしも盗賊に追われても逃げやすいように、じょうぶなひより下駄をはいた。

さあ、出かけようと源さんと作助は、おたがいに顔を見合せてみた。ところが着ているものがぼろぼろのわりには、顔がのっぺりときれいすぎるのに気がついた。

「こりやあ、頭かくして尻かくさずじゃのうて、お尻かくして頭かくさずじゃ。」

と、源さんが笑うと、



「そいじゃ旦那。鍋の炭でもぬりやしよう。」

といつて、ふたりは顔じゆうに炭をぬり合った。それを見ていたおかみさんや、ほかの使用人らが、腹をかかえて笑った。

「さあ、これでよかろう。」

と、ふたりは出発した。しかし、十二月の中頃のことである。伊吹おろしの冷たい風にあたると、涙が出たり、鼻水が出る。ことに作助は、寒い風に弱い男であったから、涙や鼻水をしきりに



ぼろ着でぬぐった。すると、せっかくぬっておいた鍋炭が、少しずつ、少しずつとれていった。けれども、ふたりは、寒い風にあたるまいと、うつむいて歩いているから、炭のとれていくのに気づいていなかった。

そうこうしているうちに、悪名高いハオカ山に近づいたが、ふたりは、すっかり変装しているのので、ゆうゆうとハオカ山を通りすぎるつもりでいた。それでも、

「もしものことがあるといけないから、ここらでひと息入れておこ

う。」  
と、源さんが言うので、ふたりは風あたりの少ないところで腰をおろした。

その時だった。ガサガサと音がしたかと思うと、ハオカ山の上の方から、こっちに向かって四・五人の人影が動き始めた。(盗賊だ。)





どうしよう……と、ドキン、  
ドキン胸が高なり出した作助に、  
「だいじょうぶだ。落ちつけ。」  
と、源さんがにたりと笑ってみ  
せたが、顔を見合わせたふたり  
は、急に青くなった。顔の炭が、  
すっかりぬぐわれて、とてもこ  
じきには見えなくなっていたの  
だ。  
「やれ、よわったぞ。」  
と思つたとたん、盗賊どもにと  
りかこまれた。  
「やい。きさまらはどこへいく。」

「鶴沼宿まで……。」

と、おそろるおそろる答えると、

「気のどくだが、すつぺりぬいでもらおうか。」

「どうやら盗賊どもは、ふたりの正体に気づいたらしい。」

「ごじょうだんを。こんな寒い日に、はがされたら死んでしまうが  
な。それに、みてくんさい。このこじき親子を。なんにもあらへ  
ん。ごかんべん。ごかんべん。」

と、源さんが手を合わせたのが運のつき。

「おい、おい。つべこべ言うな。こじきおやじとやら。おめえの合  
わせている手の指に、えらいごりつばな指輪が光っておるじゃね  
えか。」

「そういえば指輪をはずすことを忘れていた。」

「へ、へ、へ、へ。お前のつらをようやく見りやあ、何者かく  
49



らい、おきつしだい。それくらいの見とおしがきかずに、こんな盗賊はできやしねえよ。」

「おい。そつちからやつちまえ。」

親分のとびきり大きな声に、

「へえい。合点だ。」

「うへえ。きたねえまといものだ。こりやあ、くせえ。くせえ。」

あつというまに、作助は、すっぱだかにされてしまった。作助がやられている間に、源さんは、地面にしゃがみこんでしまった。そして、ふところから出した大じなきんちやくを着物の中ですばやく左手にもちかえ、右手でひより下駄をぬぎ、それでいっしょうけんめい地面をほった。そして、その穴にきんちやくを手早く落とし、ひより下駄で、また土をかぶせた。あつという間の早わざだった。「やい、てめえが主人らしいが、おとなしくあり金を出しな。」





と、ひげづらの恐ろしい大男がいった。

「いえ、その——、お金など一文も、もつとらへんで……。」

「いつまでとぼけるつもりじゃ。こうしてやる。」

というが早い、源さんも、すっぱだかにされてしまった。

「ちえ。ほんとうに、何にももつとらん。みそこなつたわい。」

「しかたねえ。この指輪と着物だけはもらつとくぜ。」

と、指輪をぬきとり、

「さあ、このうすぎたない上つぱりだけは恵んでやる。それだけでもありがたいと思つて、とつとといきやあがれ。あばよ。」

盗賊どもは、そう言ひのこして、そそくさとハオカ山へ姿を消した。

「ああ、さむい。クシャン。」

そこらにほうりなげられた上つぱりを拾つて源さんは、さつそく

かぶつた。そして、しゃがんだままもそもそと、足元のあたりを動かしている。

「旦那さま。どうしなさつた。」

「シツ。シート。」

そう言いながら源さんは、さつき土にうずめたきんちやくを、そつとほり出してにたりと笑つた。

作助は、源さんの頭のよさに驚きながら、ぼかんと口をあけた。

「おい作助。何しちやる。はようもどらんとかぜひくわい。」

「へい。ハツ、ハクシヨン。」

ふたりは、くしゃみをしいしいきたない上つぱりにくるまり、いちもくさんに走つて家にたどりついた。

やつぱり、ハオカ山の前は、おそがいわい。

註 ハオカ山は、現在の那加不動ヶ丘の小山のこと

長谷川恭子



## タヌキやぶ

お寺さまへお参りに行くときやあ、  
タヌキやぶん中を通ると、近道や。  
けど、タヌキやぶの道はほそて、  
迷路みたいに折れ曲がつとる。  
まちがえると、  
火のみやぐらの方へ出てまうんや。

夏のタヌキやぶは、ひんやりとすずしい。  
ぶーんとやぶのかさがする。



根ぶしが土をわりやぶって出とる。  
ゆっくりは、しとれん。  
あわてて根ぶしを折って、走ったもんや。  
やぶかが、すぐにくいつくで。

冬のタヌキやぶは、寒くてうす暗い。  
雪が降ると、  
竹が通せんぼして通れえへん。  
さわるとはね上がって、  
雪がドサドサツと落ちてくる。

「夜のタヌキやぶは、ぜってえ通るなよ。  
タヌキがおって、よう、ばかすで。」





と、いうばあさまの話をよく聞いたもんや。  
「わしや、昔、朝暗いうちにお寺まいりに  
行こうとしてタヌキにばかされて  
えらいめにあつたことがあるに。  
お寺さまに行こうと歩いてても歩いてても、  
どうしても、おみどうに着けんのや。  
明るうなつてみたら、どえらい遠くへ来とつた。  
タヌキのしわざや。  
タヌキがしつぽをひよいと動かすと、  
そっちへ歩いてしまふんや。  
わしや、もうくつたくたんになって、  
小昼こひるどきにやつとこさ、  
家へもどつてきたんや。」



タヌキやぶを通るときやあ、  
まゆげにつばをつけて通るとええ。  
タヌキというやつはな、  
まゆげの数をかぞえてから、  
人をばかすんやげな。  
そんで、まゆげにつばをつけて  
数えれんようにしとると、ええぞよ。」  
だから、今でもタヌキやぶを通るときは、  
まゆげにつばをつけてこするんや。  
そして、まゆげを手でかくして、  
通ると安心やと。







い  
な  
は  
の  
は  
な



すげ傘如来がきこよりのい

むかし、織田信長が岐阜の城を攻めたときの話じゃ。

織田ぜいはな、そのころは豆渡の渡しといった今の前渡西町あたりで、木曾川をわたって、金華山の城へ攻めていったそうな。

「信長さまは、いくさをするど、その村の神社やお寺など人が大ぜい集るところは焼きはらってしまいうそうじゃ。」

「わしらの村を通るげなぞ。」

「えらいこつちや。どうしたらええんや。」

「なむあみだぶつ。なむあみだぶつ。」

こんなことを口々にいいながら、戸をかたくしめて年よりたちは、61





仏さまに手を合わせ、女・子どもは、息をひそめておった。またよその村にしんるいがある者の中には、荷物をまとめて村をにげだした者もいたそうなの。

そんなそうどうの最中だが、信心深い衆たちは安楽寺に集まり、如来さまにおすがりするのがいちばんよいと、一心におがんでおったそうなの。

「如来さまは、わしらの守り本尊じゃ。この寺をなにがなんでも守らならんのだよ。」

「わしらは百姓じゃ。織田ぜい相手に勝てる見こみはないものな。」

「そやけど、この寺にこもってては、如来さまといっしょに、わしらも灰になつてしまう。どうしたらええんや。」

みんなは、とほうにくれてしまった。

ちょうどその時、



「織田ぜいが川を渡ったぞ！」

と、呼びまわる声が聞こえてきた。みんなは、はっと顔を見あわせた。

そのときや、次郎左エ門がつかつかと如来さまに近づいて、

「如来さま、しばらくしんぼうして、わしのせなかにおぶさつてくだされや。」

といつて、ひよいと如来さまを背おったのじゃ。

「みな衆、寺は焼かれるかもしれんが、如来さまだけは守らにやあかん。わしが背おつてにげるで……。」

このことばに、みんなはあつけにとられたが、しばらくして、

「よっしゃ。わしらもお供さしてくだされ。」

「わしもや。」

「わしもや。」

そこにいた人びとはみんな勇気がでてきた。

だけど、あまりおおいと目立つので三、四人だけがお供することにした。

その夜は、どしゃぶりの雨でなあ。見送る者の中から、

「如来さまがずぶぬれになってしまう。むさいが、わしの傘をかぶってください。」

そういいながら、じぶんのすげ傘をかぶせたそうな。

こうして、次郎左エ門たちが、如来さまをぬらすまいとかばいながら大佐野橋まできたとき、雨の中を東の方からおしよせてくる織田ぜいが見えてきた。

「こらあかん。すぐそこまできとるぞ。」

「今、動いたら見つかってしまうで。」

「かくれることじゃ。じつとしとれよ。」





と、近くにあった小高い森の中  
にとびこんだ。

みんなは、雨にずぶぬれにな  
りながら背中せなかの如来にょらいさまをかこ  
うようにして身をかがめた。そ  
して、じつと息いきをひそめ織田おだぜ  
いの通りすぎるのを待ったんじ  
や。

どのくらいたつたろう。長い  
ようにも思えたが、やつとあた  
りが静しずかになった。

「もうよい。」

「ああ如来にょらいさまをお守りできた。」

「こんなありがたいことはない。」

だれのほほにもなみだが流れおちた。

かすむまぶたをこすりながら村の方を見た。あんのじょう、あの  
安楽寺あんらくじが夜空をまっかにこがしてもえあがっていた。

でもな。すげ傘かさの如来にょらいさまは、ひとしずくの雨もかからず、次郎じろう  
左エ門さえもんの背中せなかで、やみの中にこうごうしい光をはなっていた。そし  
て、ねむってみえるような安らかなお顔であった。

みんなはまた、

「なむあみだぶつ。」

「なむあみだぶつ。」

と、となえてありがたがった。

それからというものの、この森の中の小高いところは、如来塚にょらいづかとい  
われるようになり、大佐野橋おおさのを如来橋にょらいというようになったと。



## かたは屋敷



68

むかし、この小佐野のあたりは、沼地が多かったで、あっちゃこ  
つちやに、ようけヨシが生えとつたんやと。

そのころはの、まだ三井川が村の北の方に、東から西へと流れ  
とつた。その流れにそうての、年貢道が通つておつたが、そのくろ  
にもヨシはびつしり生えとつたそうな。

ヨシは沼地や川のふちが好きで、水ぎわに根を深くおろして生え  
とるで、日照りにも長雨にも負けえへんのじゃ。いつもあおあおと  
して、しゃんと立つとるじようぶなやつやわなあ。

じゃが、沼地の田んぼは水が多うて、どぼどぼと足が深くめりこ



むもんで、百姓衆の米作りはえ  
ろうなんぎじやつた。

ことに、長雨はいちばんかな  
わなんだもんや。田んぼの米作  
りちゆうもんは、水がのうては  
できんが、ありすぎてもイネが  
うまく育つてくれん。

めりこむ足をやつとこさ動か  
して、どろんこになって、よう  
やつと田植えをすませても、秋  
のとり入れがすむまでは、草取  
りはもちろんじゃが、お天氣の  
具合を心配して、ちいとも気を

69



ゆるすことができなんだのじゃ。

いつの年やったか、やっぱり長雨がつづいての、もうちよつとで花が咲くちゆう、いちばん大切なときに、田んぼのイネがすっかり水びたしになってまっつての、みーんなたおれてまっつたんや。

「なんちゆうこつちや。なんぎして、ようよと、ここまで育てたちゆうに……。」

これじゃあ、ことしも米がとれえへん。」

と、ようやつと雨の上った田んぼを見まわりにきた太助たすけさは、がっくりとかたを落しての、道のくろに、ぼんやりと立ちすくんでしまったんや。

どこの田んぼを見まわしても、みーんな同じ。ぐったりとたおれて、葉先を水につけてまっつとる。元気よう青い葉を天に向けて立つとるんは、ヨシばっかりやった。



ヨシが、あんまり元気よう立つとるもんやで、くやしなつた太助たすけさはの、そのヨシの葉を、両手にはさんでなぜながら、

「のうヨシよ。わしはお前さがうらめしいわな。」

まわりの田んぼを見てくれ、みーんな水につかってまっつとる。

このまんまでは、ことしも稲刈いねかりはできそうもねえ。

それやのに……。なんでそうお前さばかりが元気ええんや。

お前さの、その力の半分てええ 71



で、わしらの田んぼのイネに、分けてやってくんさつたらなあ。病気でねとるお母かあに、米つぶの入ったかゆを、喰わせてやれるんやに……。

72

村の衆しゅかて、年貢ねんぐがおさめられんとて、泣かんらん人がへるんやに……。

ていつてな、涙をぼろぼろ、ぼろぼろこぼしながら、いつまでもいつまでも、立っておったんやと。

この太助たすけさの、くやしい気持ちを通じたんやろうかなあ。その年は、ふしぎと早う水が引いての、イネも元氣をもり返してな、ま、豊作ほうさくじゃあなかつたが、どうにかええあんばいにみのつてなあ、米がとれたんやと。

大助たすけさも、村の衆しゅも、大よろこびよなあ。

けど、どういわけか次の年から、年貢道ねんぐみちのくろのヨシだけは、葉が、片っぱうにだけしか、出んようになってしまったんやと。

それからやそうな。大助たすけさんが住んどった、年貢道ねんぐみちの北のあたりを、片羽屋敷かたはやしきというようになったんわ。



## 前渡<sup>まえど</sup>のつつみ

やあつとむかし、前渡<sup>まえど</sup>は、木曾川<sup>きそがわ</sup>の洪水<sup>こうずい</sup>に泣<sup>な</sup>かされとつた。  
ある夏のはじめのことや。

「ようふる雨やのう。ことしもまた、ていぼうが切れるんやろか。」  
まいとしまいとしなおいとるに、いつこうにようならん。」

庄屋<sup>しやうや</sup>さまは、大きなため息をついて、ひとりごとを言<sup>い</sup>ながら、  
木曾川<sup>きそがわ</sup>にすいこまれる雨を見とりんきつた。  
すると、

「庄屋<sup>しやうや</sup>さま、おまえのむすめをくれんか……………」  
と、小さな声<sup>こゑ</sup>がする。



はてな——。庄屋<sup>しやうや</sup>さまは、あ  
たりを見まわしたが、だれもお  
らん。

「きつと、そら耳やろ。気もち  
がふさがつとるときやで、耳  
までおかしなつてまつたわ。」  
と、ぶつぶつ言<sup>い</sup>ながら帰ろう  
とすると、また、

「庄屋<sup>しやうや</sup>さま、おまえのむすめを  
くれんか……………」  
と、さつきとおなじ、小さな声<sup>こゑ</sup>  
がするんや。

庄屋<sup>しやうや</sup>さまはふしぎに思いなが



ら、

「さつきから、わしのむすめをくれくれと言はんは、どなたやな。」と、大きな声をかけてみんさった。

すると、川の中ほどから、きみの悪い声で、

「わしは、木曾川の主じゃ。若いむすめが三人ほしい。おまえんこには、むすめが三人おるが、そつくりわしにくれんか。そうすりゃあ、二度とていぼうはこわさんが。」

と、こんどは、はっきり聞こえた。

庄屋さまは、

「むすめをくれ言つても、すがたも見えんがいったい、どうやってさしあげるんやな。」

と、話しかけてみんさった。

川の中ほどからは、やっぱり、きみの悪い声で、

「こんどのでいぼうしゅうりのときに、石がきの中に、三人のむすめをいっしょにうめてくれればええんや。」

と、言う。

庄屋さまは、ぶるぶる、ふるえてまって、何か言おうとしたけど声にならんかった。

とにかく、村まで帰らなあかん——。庄屋さまは、はうようにして、ようようと村へ帰った。そして、村の衆をあつめて、いまの話のこらず聞かせんさった。

村の衆んたあは、

「つまり、人柱をよこせつちゆうことやな。」

と、言いあつた。そして、(人柱をさし出しゃあ、いまの苦しみからのがれられるんや)と、だれもかもが思ったんや。せやけど、庄屋さまのかなしそうな顔を見ると、まさか庄屋さまに、「むすめを、木





曾川の主にやっつけてください。」などという者は、だれひとりとしておらんかった。

みんなして、弱りきつとると、ようやつと、ひとりが、

「どうやみんな、木曾川の主にこわせんような、じょうぶなていぼうを、もういっぺんつくつてみようやないか。」

と言った。すると、みんなも、

「そうやそうや、それがええ。」  
 ということで、みんなは、それから心をあわせて、いままでに

ない、りつばなていぼうをつくろうとがんばった。

こうしてできたていぼうは、長雨がふっても、夏がすぎても、こんどは、ひびひとつはいらんかった。

村の衆んたあは、すっかり安心しておった。ところが、秋もようやくと深まって、刈り入れ前のイネが重そうにたれさがったころ、はげしい雨がきた。そして、あんなにもじょうぶにつくったはずのていぼうが、ブツリと切れてしまったんや。

村の田や畑は水にのまれて、おまけに、たくさんの家までも流されてしまった。こまりはてた村の衆んたあは、庄屋さまの家にあつまって、

「やっぱり、木曾川の主にせいやるか。」

「わしらが言うこときかなんだでやるか。」

と、頭をかかえおうた。そうして、どうとう、みんなして、地べた





げてください。」  
と、口々に言いんさつた。  
三人のむすめの心のかたいこ  
とを知った庄屋さまは、大つぶ  
のなみだを流しながら、こつく  
りどうなずかした。  
かなしいかなしい一夜が明け  
た次の日、村の衆んたあは、三  
人のむすめが、一日でも長く生  
きとれるようにと、おむすびを  
たあんと持たせて、なくな  
ていぼうの中に送りこんだ。  
そうして、大きな石をひとつ

に手をついて、

「庄屋さま、どうかむすめ衆を、木曾川の主にやっておくれんさら  
んか。」

と、たのみんさつた。でも、庄屋さまにとっては、かわいいむすめ  
たちじゃで、とうぜんのように、ことわりんさつた。

ところが、それまで、そばでじいっと聞いてとつた、一番上のむす  
めが、

「父さま、私を木曾川の主のところへやってください。」  
と言いだした。

二番めのむすめも、三番目のむすめも、

「私も、みなさんが助かるなら、よろこんでいきます。どうか私も  
やってください。」

「私もいきます。みなさんがこれいじょう苦しまないようにしてあ





### 小佐野の馬頭観音

むかし、小佐野の神明神社の秋祭りには、かけ馬をやったんや。くらの上にごへいを立て、赤と青と黄の布でかざられた馬が、安楽寺へんから如来橋まで、シャンシャンと鈴の音をさせながら走るんや。これといって楽しみもねえころのことやったで、村のしゅうがたんと集まってな。そりやあにぎやかなもんやった。

のせ、ふたつのせして、三人のむすめのはいったていぼうは、高く高くつまれていった。

それからというもの、大雨がふつても、大水が出ても、このていぼうは切れることがなく、村はほんとうにしあわせにくらせたというこどや。





「アオよ。おまえは、気があらい  
ことではそこのしゅうに知ら  
れた馬や。ちよつとぐらいかわ  
ったことがあつても、元気に走  
りぬけろや。」  
つて元気づけながら、アオの首の  
あたりをタンタンとたたいてはげ  
ました。  
「次助さどこの番やぞ。」  
つて声でした。次助さは、  
「アオ、何もないさ、思いきつて  
いけ。」

と大きな声ではげまして、しりを

ある年のこと、次助さは、毎日たんぼでいっしょに働いてるアオ  
という馬をきれいにあらうと、心ばかりのかざりつけをしてやって  
きた。アオは、小佐野へんでは知らん者のないほど気のあらい馬で  
な。次助さでなけりやだれもくつわをとれんほどやった。

村中の馬が勢ぞろいしていよいよかけ馬が始まった。ところがや、  
その年はおかしなことに、どの馬も、どの馬も神明さまの裏手まで  
来るとどうしても走らんようになってしまった。なんでかよう分から  
んが、おびえたように立ち止まったり、あばれだしたりしてな……  
いよいよ次助さのアオの番になった。次助さは、

「アオよ。きょうはみんなどうしちまつたんやろ。神明さまの辻に  
何ぞおそがいものでもおるんやろか。」

アオの目も何かにおびえたようにだまって辻のあたりを見とる。  
そういえば体もいつものようなはりが見えなんだ。



ちからまかせにたたいた。

アオはひと声いなくと、えらいいきおいで走り出した。くらにかざった布ふはまるでうしろからひっぱられとるようになびき、鈴すずはちぎれてとんでいくほど音をさせて、そりやあもうすごいいきおいやった。

うしろから追いかける次助じすけさも、

「こんだけ元気がありや安心や。やっぱりうちのアオはちがう。」  
と思ひながらアオのうしろをいっしょうけんめい走った。

ところがじゃ。あんだけのいきおいで走ったアオも、お宮のうらまで来ると、どういうわけかやつぱりぴたつと止まってまった。そして、なんかおそがいもんでも見るようにじつと立っておる。

「ほれ、アオよどやったんや。なんで走らんのや。」

次助じすけさは、手に持つとつたくわの小枝こえだでアオのしりを何度もたた

いてみたが、ちつとも走り出そうとせえへん。後あとずさりさえしはじめた。

「どうしたんやアオ。何をそう気にするんや。」

どけしかけたが、アオの体じゆうの毛はさかだつとる。まるで火事にあつたみたいにおびえてまつとる。次助じすけさにはさっぱり分からん。

「アオどうした。走れよ。走らんか。」

とまたしりをたたいたがどうしても動かん。これを見とつた村のしゆうは、

「次助じすけさ、いつもはあら馬やっていってござるけどこんな馬やったんか。」

「こんだけのどこよう走らんのやでな。」

「あら馬が聞いてあきれるわ。」

てんでに勝手なことをいってはやしたてた。



次助<sup>じすけ</sup>さはとうとうやけになって  
まっつて、アオの足といわずせなか  
といわずカマかせにたたいた。  
そのようすをじつと見とったひ  
とりのじつさまが、  
「次助<sup>じすけ</sup>さ、馬が死んでまうぞ。も  
うやめとけ。」  
といいながら近づいてきた。  
「わしやさつきからここで見とつ  
たんやけど、どの馬もここまで  
来ると走らんようになる。どう  
もあそこらへんになんか悪いも  
んでもおるようじゃ。見てみい



毛はさかだつとるし、目はなんかにとりつかれたみたいじゃ。そ  
んにせめると今に大あばれして、村のしゅうをきずつけるか、馬  
が死んでまうかどつちかやぞ。ずっとむかし、北の村でこれとよ  
うにたことがあつたつて聞いたことがある。そんな時も次助<sup>じすけ</sup>さみた  
いに馬をせめたてて走らせようとした人があつたんやと。もし  
たら馬はなあ。村のしゅうの中へあばれこんでえらいさわぎにな  
つたそうや。」

次助<sup>じすけ</sup>さは、走らんようになったアオをいまいましたしゅう思つとつたが  
じつさまのいわつしやることをじつと聞いとつた。

「村のしゅうの中へあばれこんだあと、その馬はなにかわけのわか  
らん病気になってとうとう死んでまつたんや。馬主<sup>うまぬし</sup>さはなあ、あ  
んまり馬をせめたでそのあと馬にわびる気で一心<sup>いっしん</sup>に馬頭観音<sup>ばとうくわんのん</sup>さま  
をほらしたんやと、そしたら村のしゅうの馬や牛もそれから、



けがをしたり病氣になったりしなんだそうや。どうや次助さ、こりやあ馬たちが、日ごろのあつかいになんかいいたいんかも知れんぞ。みなものしゅうとそうだんしてみたらどうや。」

そういわれると次助さは手にしていた小枝を道へなげすて、すっかり考えこんでまった。そういやあことしはいつもの年にくらべて足をおる馬が多かったし、病氣でたおれていく牛も多かった。そう思った次助さは、さつそく馬をかつとるしゅうを集め話し合ってみることにした。

集まったしゅうは、

「そういやあ、わしら馬を使うばっかしてそう大事にしてやらなんだなあ。ここはひとつ馬への恩がえしをかねて、おれんたあも北の村のしゅうのように馬頭観音をまつるかや。」

ということになり、みんなで銭を出し合って、神明さまの辻へ観音

さまを作ってもらうことにしたんや。

村に馬頭観音がまつられてから、村のしゅうは馬や牛を大事にするようになったし、神明さまの近くを通りかかったときやあかならずおまいりするようになった。そのおかげか、馬たちは前にもまして元氣にはたらくようになったしそう病氣もせんようになった。

かけ馬のにぎやかな声もまたきこえるようになったんやと。

小口 兎生





白髭さま

むかし、木曾川べりに、まず  
しい百姓の一家が住んでおった。  
おっとうは、そりやあ働きも  
ので、毎朝暗いうちに起き出し、  
各務野へ開懸に出かけとらした。  
十才になる栄太は、夕方近く  
なると、阿呆綱を持って、おっ  
とうをむかえに行くのが仕事に  
なっとった。



十月も終わりのある日、おっ  
とうは家を出るとき栄太に、  
「きょうはなあ。たんと、切株  
をつんでこならんで、いつも  
の天神さんでのうて、まっつ  
むここの白髭さんまでむかえ  
にこいよ。」  
と、いうて出かけやしたんやと。  
そんで、栄太は、寺小屋から  
帰るとすぐに阿呆綱をふりふり  
てこてこ、てこてこ堤防の道  
を東へ歩いていった。  
「いつもなら、ここでええんや



になあ。」

そういいながら、栄太は上中屋の天神さんの前を通りすぎ、松本の白髭のお宮さんのとこまでやってきた。そして、じいっと東の方を見てみたが、まんだおっとうの荷車は見えてこうへん。

「きょうは、えろうきばりんさったんやなあ。もうちよつと行かなあかんかなあ。」

ちゆうて、また歩き出したんやが、だんだん家がのうなってしまう。それに、道は松の木林の中へ入っていく、日は暮れかけてくる。栄太は心細うなってきた。

もうここらでやめて帰ろうかと思ったが、重い車を引いてなんぎしているおっとうのことを考えると、そうもいかん。

「おそがいなあ。だれぞ通らっせんかなあ。」

と、後ろをふり返りふり返り歩いてったが、だあれも通ってくれえ

へん。おそがおそが歩いとるもんやで、足がだんだん速うなつて走りだしてまいったんや。

すると、

「おーい。」

と、どこかしらんから呼ぶ声がある。おかしいな。人の姿なんぞ見えへんのにと思うと、もうたまらん。むちゃくちゃ走り出してまいった。

「おーい、坊よ、どこへ行くんじゃ。」

こんどは、すぐそばで声がある。栄太は思わず立ち止まってしまった。

そして、ぶるぶるとふるえながらあたりを見ると、大きな松の木の前には、長いまつ白な髭を生やしたじいさまが立ってござった。

「もう日が暮れるちゆうに、ひとりでどうしたんや。」



と、やさしゅう  
話しかけてござ  
った。そのじい  
さまの顔を見る  
と、栄太はふし  
ぎとさつきまで  
のこわさが消え  
て、ほっとした  
気持ちになつて  
きた。それで、  
「おれ、おつと  
うをむかえに行  
くところなんや。」



持つてきた阿呆綱を、じいさまにぶらぶらぶつて見せたんやと。

「そうか。えらいなあ。坊は。」

じいさまは、栄太とならんで歩き出さつせたんや。ふたりづれになつたもんで、栄太はすっかり元気づいて、家のことを話しながら歩いてつたんやが、しばらく行くと、じいさまは栄太の顔をじいつと見て、

「坊は、二十五才までしか生きられんぞ。」  
と、ふしぎなことをいい出さつせた。

栄太は、何のことやると、ぽかーんとしとると、またつづけて、  
「じゃがなあ。親をだいじに、だれともなかよく、神さまや仏さま  
にもおまいりして、いい心の人になつたら、きつと、もつと生きら  
れるじゃろう。」  
と、いわつせたんやと。



じゃがなあ、なんせ十才の栄太には、何のことやらようわからな  
んだ。

それでも、

「うん。うん。」

と、返事をしながら、いつもより帰りのおそいおっとうのことを気  
にしながら歩いとった。

すると、すっかり暗くなった道のむこうの方から荷車の音が聞こ  
えてきた。

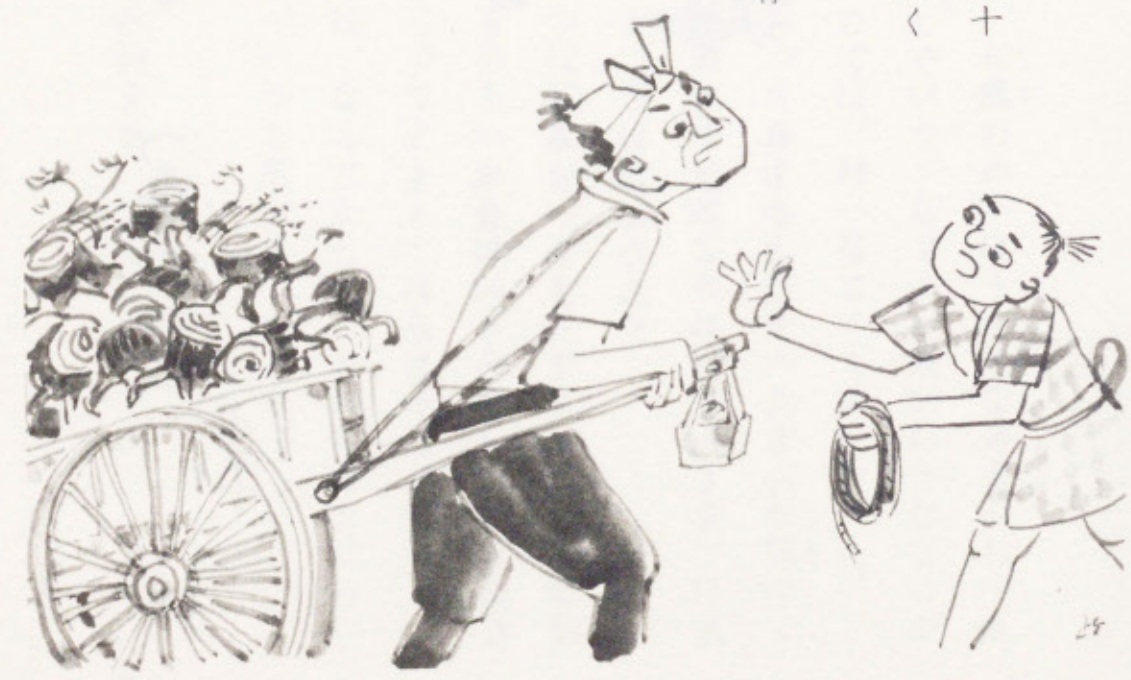
「あ、おっとうや。おっとう。」

おお声でよびながらとんで行つた。そして、この白髭じいさまのこ  
とを話そうとふり返つたんやが、その姿は消えてどこにも見えなん  
だんやと。

それからというものの、栄太はずっとおっとうを助けて、いっしょ

うけんめい働いたもんで、八十  
すぎまで生きて、しあわせにく  
らしたそうな。

西村 敏行







## つぼどんと

つよ

もう、むかしやなあ。

木曾川べりの松林に、春になると、きまって、松露がいっぱい食べたんや。

けっこうおいしいもんで、だれもがよう食べたもんや。

近くの村に、つぼどんいう、松露のめつぼうすきな若者がおった。カラスやカエルが大の仲良しやいう、ちよつと風がわりなところがあつたんやが、松露をとることで、村一番という名人やった。ところが、つぼどんは、いたってわすれんぼやったで、松露のできるころになつても、カラスやカエルと遊ぶのにむちゅうで、けろつとわすれてしまうことが多かつたんや。

それで、村の人んたあは、つぼどんがいつしよやと、ぜんぶどられてまうで、わすれてまつとるのをいいことに、みんなして、こっそり出かけて、松露を残さずとつてまうことにしとつた。

そんなことやで、つぼどんは、なんとかして、あの松露をはらいっぱい食べてみたいもんやと、いつも思つとつたんや。

ある年のことや、つぼどんが村を歩いとると、



「はいもんやないかな、今年もはや、れんによ様のお祭りがくるわな。」

「ほうやったなあ。みんなして、おまいりに行かんるまいに。」  
つて、村の人んたあが話しあつとつた。

これを聞いたつぼどんは、

「しめしめ、村の人んたあは、れんによ様に、みんな行つてまわつせる。そのすきに、わしゃあひとりで松林に行つて、しよろをぜんぶとつてまつたる。こんどこそはらいつぱいくえるやる。」

つて、考えると、急いでうちへ帰つて、まつ青な竹をわつて、大きなカゴをこしらえた。

いまか、いまかと待つてるうちに、れんによ様のお祭りの日がやつてきた。

つぼどんは、村の人んたあがおまいりに行つてまつたことをたしかめると、大きな竹のカゴをかついで、こつそりと、松林へ出かけて行つたんや。

松林には、松露しよろがいつぱいできとつた。

うれしくなつたつぼどんは、

ヨイシヨ　ヨイシヨ。

コラシヨ　コラシヨ。

つて、ちようしをあわせてとりだした。  
すると、そこへカラスがとんできて、

カアー、カアー。

つて鳴いた。

いつものつぼどんやったら、たいていそこでカラスと遊んでまうんやが、その日だけはちがう。





ヨイシヨ ヨイシヨ。  
コラシヨ コラシヨ。

って、まったくちょうしを合わせとった。

つぼどんの大きなカゴは、ずんずん重うなった。

「こんだけありやあ、こんやこそ、はらいつばい食べれるやろ。」

つぼどんは大よろこびで、だれにも見つからんように、あつちにもこつちにも、用心しいい帰ってった。

その夜さ、つぼどんのかまどには、おいしい松露しょうろのにおいがいっぱいやった。

もちろん、つぼどんのはらはいっぱいやで、とつぷりまんぞくや。

カキの実がまっ赤にうれた秋の夜のことや。

村によりあいがあつて、みんなが集まったとき、

「おかしなこともあるもんや、ことしや、しよろが、ひとつもはえんかった。」

って、じいさまがぼつりと言いんさつた。すると、村の人んたあも口々に、

「そうやて、どんだけもさがしても、ひとつも見つからなんだわなあ。」

「その日にのうても、二・三日もたちやあ、たいていがはえとつた



もんやに、十日たつても、二十日たつても、ひとつもはえんかった。」

なんでやろうかな。ふしぎやないかねって言いあつとつた。

そこへ、つぼどんがひよっこり、

「そうや、わしゃあ、もうすっかり、わすれてまつとつたが………  
……。」

つて、あのれんによ様のお祭りの日のことを、正直しょうじきに話しやした。

これを聞いた村の人んたあは、

「そんなら、しよろの根つこも、たねも、ぜんぶつぼどんのはらの中つちゆうわけか。」

つて、大たまげで、つぼどんをにらんだ。

村では、みんなが松露しょうろをすきやつたで、これは根つこに残しておく分、これはたねに残しておく分つて、少しずつ残しておくとりき

めをしていたんや。ところが、そこはそれ、わすれんぼのつぼどんのことや、そのとりきめまでも、すっかりわすれてまつとたんや。

村の人んたあが目があんまりにもけわしいもんだで、つぼどんは頭をかきかき、

「えへへ………。」

つて、ごまかしわらいをしたんやが、そのつぼどんのまぬけた顔を見て、村の人んたあも、ついついわらい出さずにはおれんかったんやと。



## おのぶさまよキツネ

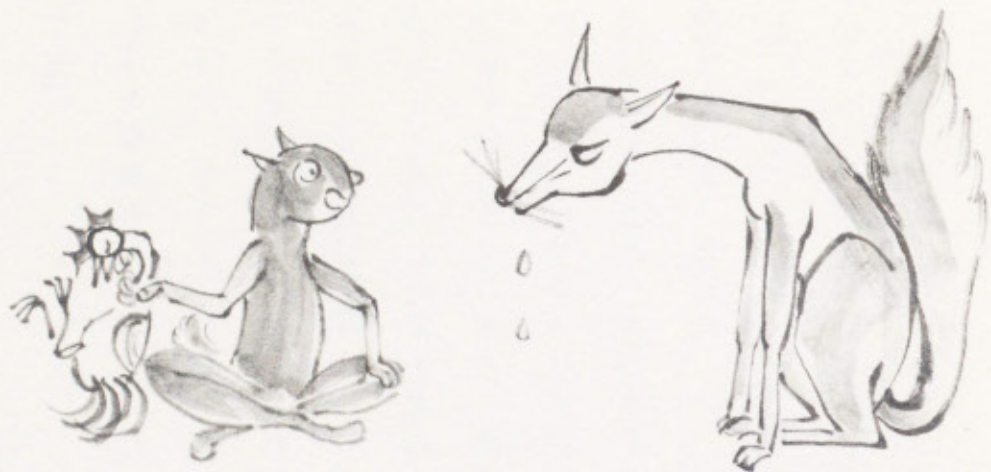
むかし、木曾川きそがわのふちのふかい松林に、気のよわいキツネが一ぴきすんどつたと。

ある日のこと。うまそうなニワトリをくわえて帰ってきたイタチに、

「おいイタチどん。きょうもまたニワトリをとってきたのかや。」

わしも一ぺんでいいで、そんなうまそうなニワトリを、はらいつぺえくってみてえぞな。どうやったらそんなにうまくとってこれるんやな。わしにも教えてくれや。」

と、たのんだんやと。するとイタチはくすりつと笑つての、



「そんなこたあ、わけねえさ。人間をな、まずだまくらかしたるんや。」

戸のすきまから、しつぽをつつこんでな。ぶらん、ぶらんとふつたるんやわ。ほすと人間はな、みーんなころんと眠ねむつてまうもんや。人間を眠ねむらしてまあもう、あとはかんたんやわ。」と、教えてくれた。

ところで、この松林の近くの一けんやにはな、おのぶさちゅうばあさまが、ひとりですんでおった



そうな。

しずかな秋の夜うさやった。こん夜もおのぶばあさはの、いつものように、ビーン、ビーンと、糸をつむいでおったと。するとな、トントン、トントンと、だれか戸をたたく音がするんや。

(おや、こんなおそくに、いつてえだれじゃろう?)  
と、思て、音のした方を見たんやと。

ほすとな、どうじゃろ。雨戸の大きなふし穴あなからな、ちゃ色の太いしつぽが、バサリツとどびだしたんや。

(ははーん。また、キツネかイタチがわるさしにきたんやな。)と、思てたばあさまはの、

「しっ、しっ。こら、わるさするでねえ。さつさと帰りんさい。でねえと、ひでえ目にあわすぞな。」

てつてぼったんやが、ゆーらり、バサリとしつぽはゆれとる。

「しっしっ。しっしっ。」

ぼつても、ぼつても、しつぽはひ

つこまへん。バサリ、バサリと、

いつまでもゆれとるんやと。

「うるさいな。しょうのないいた

ずらものめ!これ!」

てつて、そのしつぽをぎゅつとつ

かんだんや。

さあ、おどろいたのはキツネや

わなあ。

「ありやあ、話がちがうがな。」

てつて、あわててしつぽをひっこ

めようとしたんやが、ばあさまは





なかなかはなしてくれえへん。それどころか、ますます力を入れて中からひっぱってござる。

キツネはの、ここでつかまったらええ目にあわされる思うもんで、もう、むちゅうになつて、ひっこめようとしたんや。

そんなふうにな、りょうほうでカマかせにひっぱりあつとるもんやでの、とうとう、プツーンと音をたてて、しっぽが抜けてまったんや。

「しっぽが抜けたあ！ しっぽをとられたあ！ ケーン、ケーン。」  
巢へにげ帰ったキツネがの、しっぽのうなつたおしりをおさえて泣いとるとこへな、あのイタチがやつてきてな。

「はっはっは……。キツネどん、いいかつこうじゃのう。」  
てつて、大わらいしたんやと。

ほんでも、あんまりキツネがかなしんどるもんやでの、イタチは



キツネをだましましたことが、かわいそうになつてきたんやなあ。

「あしたの晩、ばあさんにようあやまつて、しっぽを返してもらつてこいや。」

ちゅうてな、しっぽのくつつけ方を、くわしゅう教えて帰つていったんやと。

次の日の晩……

おのぶばあさまは、しっぽをそばにおいて、

「こん夜は、えろう静かやなあ。」  
て言いながら、糸をつむいどつ



# うぬまのはなやし



たらな、コンコン、コンコンと、小さく戸をたたく音がしたんや。

「はて、こん夜は少しようすがちがうなあ。」

と、そうつと立ってえんの戸を、ちよこつとあけて見たんやと。すると、庭のすみっこでしっぽのねえキツネが、なさけねえ顔して、びよこびよこ、びよこびよこ、おじぎをしとるんや。

（ははーん。ゆうべのキツネが、しっぽを返してほしゆうてやってきたんやな。ま、かわいいそうやで、返してやるか。）

と思うたばあさまはの、

「よし、よし。わかった。そのかわり、もうこんりんざい、わるさするでねえぞ。」

てって、しっぽを返してやらしたんやと。